

「五体不満足」

乙武洋匡（おとたけ ひろただ）講談社

1998 . 10/20初版、99 . 2/18第18刷発行

昭和51年（1976）4月6日、東京生まれ

世田谷区立用賀小、用賀中、都立戸山高校を経て、早稲田大学政経学部在学中（1999.2現在）
先天性四肢切断という障害を、単なる「身体的特徴」と考えて「自分にしかできないこと」＝
「心のバリアフリー」に少しでも貢献するため、電動車椅子にのって全国を飛び歩いている。

先天性四肢切断：「あなたは生まれつき手と足がありません」 原因不明

出産後の感動の「母子ご対面」（1ヶ月延期、親に対する配慮から）

「黄疸（皮膚が異常に黄色くなってしまう症状）が、激しい」という理由を作り、1ヶ月延期
「対面の瞬間」：

「その瞬間」は、意外な形で迎えられた。「かわいい」－母の口をついて出てきた言葉は、そこに居合わせた人々の予期に反するものだった。泣き出し、取り乱してしまうかも知れない。気を失い、倒れ込んでしまうかも知れない。そういった心配は、すべて杞憂に終わった。自分のお腹を痛めて産んだ子どもに、1ヶ月間も会えなかったのだ。手足がないことへの驚きよりも、やっと我が子に会うことができた喜びが上回ったのだろう。

この「母子初対面」の成功は、傍（はた）から見る以上に意味あるものだったと思う。人と出会った時の第一印象というのは、なかなか消えないものだ。後になっても、その印象を引きずってしまうことも少なくない。まして、それが「親と子の」初対面となれば、その重要性は計り知れないだろう。

母が、ボクに対して初めて抱いた感情は、「驚き」「悲しみ」ではなく、「喜び」だった。

父親の授業

母親は、新聞に載っていた「子どもに本を読んであげないということは、子どもの脳の前頭葉（思考・判断などが営まれる部分）を切り取る手術をしているのと同じことだ」という文章に刺激され、暇さえあれば、本を読んでくれた。 教育パパ、教育ママ

4歳の時、聖母幼稚園（世田谷区）に入園

友だちからの質問責め

「どうして手や足がないの」

「ママのお腹のなかにいた時に病気になって、それでボクの手と足ができなかったんだ」

小学生時代（1～4年生）

高木先生は、ボクに対して、意識的に厳しくしていたようだ。

「乙武に「コワイ先生」だと思われてもいい。その代わりに、「でも、高木先生に受け持たれてよかった」と言われるような教師になりたかった」と言っている。

5年～6年：担任 岡先生の考え

「できること」と「できないこと」をしっかりと区別しなければならない。

このことは、ボクのような障害を持った人間が社会に出て、職業を選ぶ際、非常に重要なことになってくる。「今」だけでなく、遠い将来のことまでも考慮に入れた教育をしてくれたという点では高木先生と同じだ。

その頃、国語の時間に「特徴」と「特長」の違いについて学んだ。

「特徴」：「他と比べて、特に目立つ点」－単なる違いだけを表す

「特長」：「そのものを特徴づける長所」－他とは違う「優れた部分」を表す

ボクの自己紹介「特徴・手足がないこと 特長・手足がないこと」と書くようになった。

障害者にも出来るゲーム

目の前にいる相手が困っていれば、なんの迷いもなく手を貸す。常に他人よりも優れていることを求められる現代の競争社会の中で、ボクらはこういった当たり前の感覚を失いつつある。

助け合いができる社会が崩壊したと言われて久しい。そんな「血の通った」社会を再び構築しうる救世主となるのが、もしかしたら障害者なのかも知れない。

高校3年生の時 映画を撮影した

「usquebaugh (ウシユクパーハー)」「生命の水」の意(サブタイトル)

(人間は、一滴の水のようだ。一滴の水は、大海に落ちてしまえば、その存在は分からなくなってしまいうらい、ちっぽけなもの。だが、大海は、その一滴一滴の水から成り立っているのだ。それは人間も同じ。…… この世界は人間ひとりひとりで構成されているんだ。そう考えれば、ひとりひとりが価値のある、大切な「生命」なんだよ) 適材適所

障害を持った人間しか持っていないものというのが必ずあるはずだ。そして、ボクは、そのことを成し遂げていくために、このような身体に生まれたのではないかと考えるようになった。

せっかく与えてもらった障害を生かし切れない自分に腹が立った。「宝の持ちぐされ」

早稲田大学時代 多士済々

早稲田商店会会長の安井さんの「安井語録」から

「うちの商店会では、「失敗」と書いて、「経験」と読むんだ。つまり、失敗をしないということとは、経験を積まないということ。」

市民参加ではなく行政参加へ

(俺達が場を作って、そこに行政に加わってもらおう、いわば「行政参加」なんだ)

「障害は個性である」という言葉をよく耳にする。ボクには、なんだか、くすぐったい。健常者には、ただの強がりに聞こえる場合もあるようだ。子どもの頃は「特長」と捉えていたボクの障害だが、今では、単なる身体的特徴にすぎないと考えるようになった。太っている人、やせている人、背の高い人、低い人、色の黒い人、白い人。そのなかに、手や足の不自由な人がいても、なんの不思議もない。よって、その単なる身体的特徴を理由に、あれこれと思いつく必要はないのだ。

子どもの前でよくこんな話をする。「みんなのなかにも、メガネをかけている人がいるよね。それは、眼が悪いからだね。ボクも、足が不自由だから車椅子に乗っているんだ」と言うと、子どもたちは「じゃあ、一緒だね」と笑う。そこで「メガネをかけている人って、かわいそう？」という質問をすると誰もうなずかないのに、「じゃあ、車椅子に乗っている人は？」という質問には、ほとんどの子が口を揃えて「かわいそうだ」と言う。

「みんなは、眼が悪いからメガネをかけるのと、足が不自由だから車椅子に乗っているのは同じだと言ったのに、どうして車椅子の人だけ、かわいそうなのかな」と言うと、「眼が悪い人は、メガネをかけることで見えるようになるけど、足が不自由な人は、車椅子に乗っても出来ないことが沢山あるから、やっぱりかわいそうだ」という答えが返ってくる。

子どもたちの意見は、的を射ているように思う。障害者が「かわいそう」に見えてしまうのも、物理的な壁による「出来ないこと」が多いためだ。かわいそうな人など、多いより少ない方がいいに決まっている。

障害者を苦しめている物理的な壁を取り除く = 心の壁を取り除くことが大切

ハードのバリアフリー化 障害者に「慣れ」ることが必要 「慣れの問題」

心のバリアフリー

「子どもたちは、とても柔軟。「障害者」「健常者」と勝手に線引きするのは大人であって、子どもたちの世界は、言ってみれば「何でもアリ」。

「バリアフリー」から「ユニバーサルデザイン」へ

「ユニバーサルデザイン」: バリアフリーを更に一步進めた概念

バリアが存在するからバリアフリーにしなければならないという基本的な考え方に基づいている。障害の有無を問わず、すべての人々が利用できる空間を創り出そうという考え方。

障害者に限らず、誰もが利用しやすい普遍的なデザイン(障害者、高齢者、すべての人)

障害者とのおつきあい

「初めて出会った時に、必要以上の壁を感じてしまうのは仕方がない。しかし、時間が経っても、つまり、「慣れていない」という言い訳が通用しなくなっても、なお、その障害者に壁を感

じてしまうようであれば、それは障害者側の責任であると、ボクは思っている。そこで重要なのが、人柄・相性といった問題であるのは、健常者同士のつきあいと何ら変わりはない。」

そして、しばらく接していても、その人とはつきあいづらいと感じたら、「障害者だから」と変な同情を寄せて、無理につきあう必要はないだろう。その時、その障害者が「差別だ」などと寝言を言ったら、きちんと教えてあげて欲しい。「アンタの性格が悪いんだよ」と。